

ミスコン意識の現在

信時 哲郎

(甲南女子大学文学部日本語日本文化学科教授)

はじめに

世界4大ミスコンというものがあるらしい。ミス・ワールド、ミス・ユニバース、ミス・インターナショナル、ミス・アース… 名前から想像しようにも、どのコンテストが最も出場者が多いのか、最も歴史や権威があるのかわからない。本部がそれぞれイギリス、アメリカ、日本、フィリピンであることなども、調べてみて、今回、初めて分かった次第。この他にもミス・インターコンチネンタル、ミス・グランド、ミス・ビキニ・インターナショナルなどの国際的なコンテストがあり、ベネズエラのように国策として美人を増やし、国立のモデル学校やエステを作って、これら国際的コンテストの上位入賞の常連となっている国もあるという。

しかし、これらの大会は、ほとんどが対象をミス（未婚女性）に限定しており、ミスター・コンテストの数が少ないことを考えても、ミスコンを女性差別だとして反対する声が世界的に大きいことは十分に予想できる。事実、日本でも1989年の花博（国際花と緑の博覧会）における「「ミス・フラワークィーンページェント EXPO '90」開催中止を要求する抗議書」をきっかけとした反対運動は、一定の成果をあげ、今日では自治体等の主催によるミスコンは、やりにくくなっているようだ。

ただ、近年は、このミスコンに対する女性たちの意識が変化してきているようにも感じられる。現に、甲南女子大学の学生自治会・清光会では、2015年に大学を盛り上げるためのイベントとしてミスコンテストの実施を検討していたともいう。本稿では、女子大学生へのアンケートなどを通して、女子学的な視点からミスコン意識の現在について考えてみることにしたい。

ミスコンテストの歴史

日本におけるミスコンテストの始まりは、1891（明治24）年7月の浅草・凌雲閣（十二階）における百美人だとされている。当時としては高層建築であった浅草十二階だが、開業早々に目玉であったエレベーターが運転停止となったため、新しいアトラクションが必要となった。そこで、玄人の女性100人（実際は105人）の写真を並べ、入場者に投票させる企画が生まれ、これが大評判となったらしい。

ただ、江戸時代においても遊女の番付は日常的に行われおり、メンタリティに関して大きな変化があったとは考えにくい。美女をありがたがる風潮も、江戸初期には遊女評判記が好んで読まれ、さまざまな遊里のガイドブックが出版されたり、美人画が人気だったことを思えば、近世と近代では、写真や新聞が使われることによる媒体の変化こそあるもの、あまり大きな違いはなかったように思う。

その意味で、大きな転換があったと言えるのは、1908（明治41）年の時事新報による全国美人写真審査だったかもしれない。というのも、一般女性がコンテストに駆り出されるようになったからだ。しかし、このコンテストの優勝者・末弘ヒロ子は、虚栄心に駆られて応募したとして学内外から非難され、本人が応募したわけでもないのに、在学していた女子学習院中等科の退学処分を受けていることを思えば、一般女性の参加は、まだ時期尚早だったということになる。退学は当時の学習院院長・乃木希典まよすけが決めたようだが、乃木はヒロ子に野津道貫（侯爵）の息子に嫁がせる配慮もしたともいう。当時の女学校では、卒業することの方がむしろ不名誉で、在学中に結婚できなかつた女性を容色づらに欠点のあるためだとして、卒業面などと陰口を言われていたことを考えると、退学して侯爵家に嫁いだヒロ子は、道筋に紆余曲折こそあったものの、入学当初の目的を無

事に果たした「勝ち組」だったということになるのかもしれない¹。

戦後になると、日本に対する救援活動「ララ物資」への感謝とアメリカへの女性親善大使の選出を目的にしたミス日本が創設され、1950（昭和25）年の第1回で優勝したのが、後に女優となった山本富士子。この後、さまざまなマスメディアや自治体等の主催でミスコンテストは頻繁に行われることとなり、1970年代になると大学におけるミスキャンパスの選出もさかんになっている。女子大生の数は80年代頃から急上昇し、「ミスDJリクエストパレード」（文化放送 1981年～1985年）や「オールナイトフジ」（フジテレビ 1983年～1991年）などの番組が人気となり、女子大生ブームとも言われたが、彼女らがルックスやコミュニケーション力などからパーソナリティとして選抜されてきたことを思えば、ミスコンが常態化・日常化したということもできるかもしれない。

しかし、先にも触れたように、1989年には堺市女性団体連絡協議会による「花博「ミス・フラワークィーンページェント EXPO '90」開催中止を要求する抗議書」が出され、ミスコン批判の声は大きなものになっていった。曰く、「ミス・コンテストは女性を品評の対象として“美と健康と知性”をうたい、競わせるものです。「美」という人それぞれの固有の価値を勝手なしかも非常に画一的な基準によって審査が行われているのです。身長や顔かたち、肌の色や形状、プロポーションといった本人の意思や努力ではどうにもならないことについて、優劣や順位をつけることは明らかに人権侵害であり、差別そのものです」。これ以降、能天気ミスコンを続けていくことはしにくくなった。

ミスキャンパスも1993年11月11日の読売新聞によれば、実施校は1990年代から65ヶ所から35ヶ所に減り、学園ミスコンの花形と言われた上智大学のミスコンも中止されたという。

ミスコンへのバッシングは各自治体にも波及し、富山県では、こうした流れから2001年にミスコンテストではなく、既婚か未婚か、また男女をも問わないコンテストを行うこととなったという。しかし、男性からの応募は極端に少なく、男性が代表に選ばれることもなかったという（「読売新聞（富山版）」2009年9月9日）。また、2004年からミスコンを始めた栃木県真岡市では、男女共同参画の流れから翌年からはミスターコンテストも行うことになったが、ミスは年に5～10回出番があるのに、ミスターは多い年でも年に3回しか呼ばれることがないことから、ついに2012年にはミスターの方を中止したともいう（「朝日新聞（栃木版）」2012年8月12日）。

甲南女子大学でのアンケート

2016年度前期から、甲南女子大学の共通教育科目として「女子学」が始まったが、その際に受講者187名のアンケートを実施したので紹介したい（対象は全学科の1年生）。ただ、ミスコンの歴史や現状などを語った授業中に行ったアンケートなので、バイアスが全くかかっていないとは言えない。しかし、事前にほぼ同内容のアンケートを行った元信時ゼミ生の宮脇美咲の行ったアンケートとほぼ同じ結果がでたことから、大きな瑕疵であったとも言えないように思う²。

Q1 ミスコンに興味はありますか？

はい	67	いいえ	41	どちらでもない	79
	35.8%		21.9%		42.2%

¹ 井上章一『美人論』（朝日文庫：1995, 20）。なお本論全体を通して、同著と『美人コンテスト百年史』（朝日文庫：1997）を参考にしている。

² 宮脇美咲「ミスキャンパスから見るミスコン 甲南女子大学のミスコンを巡って」（2015年度 甲南女子大学信時ゼミ卒業論文 未公表）。アンケートは宮脇論に基づいて行ったが、論文化にあたって文言を一部修正した。その他、本稿は宮脇の論文に示唆されるところが大きい。

Q2 女性の容姿に優劣を付けることに賛成ですか？			
はい	45	いいえ	17
	24. 1%		9. 1%
		どちらでもない	125
			66. 8%
Q3 女性にとって容姿は大切だと思いますか？			
はい	163	いいえ	0
	87. 2%		0%
		どちらでもない	24
			12. 8%
Q4 南女でミスコンを開催することについて賛成ですか？			
はい	76	いいえ	12
	40. 6%		6. 4%
		どちらでもない	99
			52. 9%
Q5 あなたは美人（女性）が好きですか？			
はい	145	いいえ	0
	77. 5%		0%
		どちらでもない	42
			22. 5%
Q6 ミスターコンテストに興味はありますか？			
はい	52	いいえ	39
	27. 8%		20. 9%
		どちらでもない	96
			51. 3%

このデータを見て、最初に確認しておくべきことは、ミスコンにもミスターコンにも、特に興味がないという学生が半数ほどいたこと。ミスコンに対して、特に賛成したいという学生も、反対したいという学生も、全体からみれば少数だということである。そのことをふまえた上で、分析してみたいと思う。

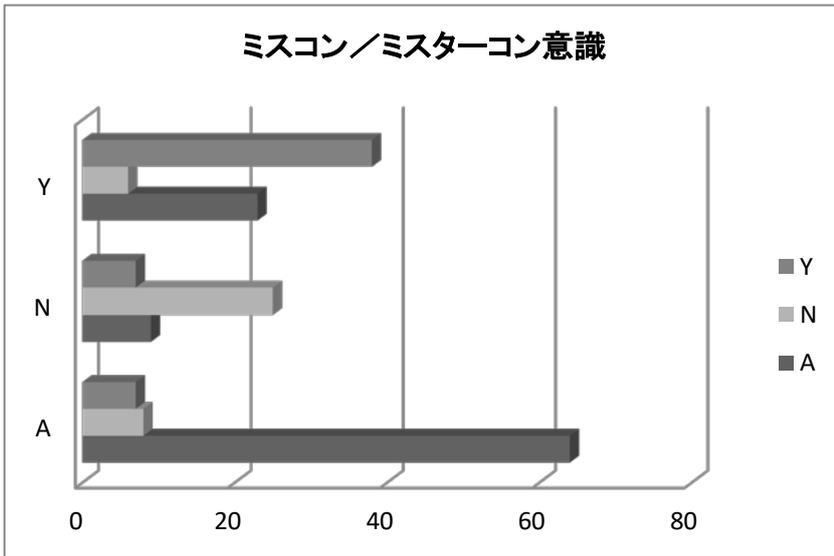
まず、Q3で「女性にとって容姿が大切だと思いますか？」という質問をしているが、これに対して「いいえ」が0人であること。「どちらでもない」も、他の質問に比べて圧倒的に回答者が少ないことが目を引く。つまり、自分自身が美人なのかどうか、また、容姿について重きを置いているのかどうか、また、これに賛成か反対かはともかく、現実社会ではこうしたことが重要視されているということに意識的だということである。

そして、Q5の「あなたは美人（女性）が好きですか？」に対しても「いいえ」が0人であったのも興味深い。「どちらでもない」も、比較的回答者は少数である。女性の容姿の良し悪しを評価するのは男性たちだ、といった趣旨の文章を目にすることは多いが、当の女性たちも美人が好きなのである。この単刀直入な質問項目は宮脇の発案によるものだが、女性に対して美人の女性が好きかという問いかけ自体、これまであまりされたことがないのではないかと思う。女性の容姿を重視するのは男性なのだ、という考え方自体が、どうも見当はずれになっているようなのだ。

ただ、Q2のように、容姿に優劣の差をつけることとなると、積極的に賛成する者は24.1%に減っていることも見逃すわけにいかない。しかし、アンケートと同時に書かれたコメントなどから総合的に考えると、フェミニニズム的・人権的な意識から「いいえ」と答えているわけでもなさそうで、「どちらでもない」という答えが66.8%となっていることからわかるとおり、容姿に優劣をつけて序列化することに意味があるのかどうか、優劣をつけることが可能なのかについて疑問に思う人が多かったのではないかというように感じられる。

ミスコンとミスターコンについてはクロス集計を試みたところ次のグラフのような結果となった。ミスコンに対する回答者数をY（はい）、N（いいえ）、A（どちらでもない）に分け（縦軸）、そこからミスターコンに対する回答者をそれぞれY、N、Aのデータとして分けて示した（横軸）。

ミスコン／ミスターコン意識



最多数はミスコンについてどちらでもないと答え (A)、ミスターコンについてもどちらでもない (A) と答えた者である。次いでミスコンに興味を持ち (Y)、ミスターコンにも興味があると答えた者 (Y)。3番目がミスコンに興味を持たず (N)、ミスターコンにも興味を持たない者だ (N)。これら3つはわかりやすい。

しかし、4番目に多いのがミスコンには興味があるものの (Y)、ミスターコンには「どちらでもない」と考えている者 (A)である。

これとは逆の、ミスコンは「どちらでもない」が (A)、ミスターコンには興味があるという者 (Y)よりも3倍多い。単純に言い換えれば、美人には興味があるが、イケメンにはあまり興味がない、ということだ。

自治体で選ばれたミスたちにお呼びはかかるが、ミスターたちはなかなか呼ばれないという記事を紹介したが、それは何も自治体や商店街の男性たちの好奇の視線だけが、美しい女性に集まっているというのではない。先に美人が好きだと答える学生が多いというアンケート結果を紹介したが、女性たち自身が美しい女性たちに注目しているということになるのではないかと思う。

これは堺市女性団体連絡協議会の言い方に準えれば、女性自身が女性に優劣や順位をつける人権侵害・差別に加担しているということになる。ただ、ここから「女性の敵は女性だ」などという話を引き出したわけではない。また、だからと言って、女性たちがイケメンがキライだなどというわけでもないだろう。それはまた別の話だ。ただ、女性は女性が美しいこと、カワイイことにとっても興味がある、ということである。

今更、わかりきった話をするように思われるかもしれないが、女性ファッション誌に登場する女性たちはファッション・アイコンとなり、人気を博す例はエビちゃん・もえちゃん (蛭原友里・押切もえ)をはじめ、枚挙にいとまがない。彼女たちの人気を支えたのが、男性たちではなく女性たちであったことも、今更、付け加えるまでもないだろう。

女性アイドルにしても、彼女らを支持するのは男性ファンだけでなく、たとえばももいろクローバーZのように、男性ファンも多いが、女性ファンが多いことでも有名なグループもあり、女性ファンだけを対象とした女祭りも大人気だという。

しかし、男性アイドルの男性ファンというのはいらないようだし、男祭りというのも男性アイドルグループの超特急などが行っているようだが、あまり一般には知られていない。女性アイドルやモデルのブログをチェックして、コーディネートや化粧法、日々の過ごし方等を真似する女性の話はよく聞くが、男性アイドルのコーディネートを真似しようという男性の話はあまり聞かない。女性たちのファッション・アイコンは多々いるが、男性たちのファッションアイコンが、ジローラモなのかエグザイルなのか…とと言われても、大方の男性はピンと来ないだろう。理想の上司、憧れの存在としてなら、同性のプロスポーツ選手やアーティスト、実業家をあげる男性はいるかもしれないが、外見やファッションからアプローチする例は極めて珍しいのではないだろうか。これを男性社会に特有のホモフォビア (同性愛を嫌うこと) の表れだとする向きもあるかもしれないが、このロジックのみでは説明しきれないように思う。

もっとも、男性が支配する社会では、男性のファッションは問われないが、女性はファッションによって男性たちに値踏みされ、だから女性たちは男性を意識してファッションに気を遣う必要があり、いつしか女性た

ちは、男性の欲望を自らの欲望であると錯覚し、内面化するようになった… という側面も全く無いわけではないだろう。しかし、そんなことを言ったら、当の女性たちから猛反発されるのではないだろうか。

さて、アンケート結果では、一般のミスコンには興味がなくても（興味あり 35.8%、興味なし 21.9%）、自分の大学でのミスコン開催については積極的（賛成 40.6%、反対 6.4%）だという結果が出たが、これも興味深い。アンケート実施時期が入学して間もない4月というフレッシュな時期、甲南女子大学生になったばかりというアイデンティティに敏感な時期にアンケートを行ったことも影響しているかもしれない。

学生からのコメントには、すぐにミスコンのスタッフになって働きたいといった熱心なものもあったが、先に述べたように関心がないものが大多数であり、ミスコンに懐疑的な意見もあった。ただ、ミスコンを全否定するようなコメントは見当たらなかった（あるいはミスコンを語る教師への気遣いか?）。

ミスキャンパス応募者の意識

ミスキャンパスは1990年代になって下火になったと先に述べたが、ミスキャンパスに特化したポータルサイト「MISS COLLE」によれば、2017年1月現在で、関東53大学（学部・学科）、関西14大学、その他8大学が載せられており（ちなみに、「MR COLLE」では関東39大学（学部・学科）、関西6大学、その他5大学となっている）、下火という状況でもないようだ。ここに掲載されている以外にもミスキャンパスは開催されていると思われるが、彼女（彼）らは、果たしてどのような意識で応募しているのだろうか。

宮脇美咲が関西のミスキャンパス出場者に出場のきっかけをインタビューしたところ、次のような回答があったという。

- ・アナウンサーを目指すためです。ミスキャンは、アナウンサーを目指す上での登竜門になると考えました
- ・前年度のファイナリストの方々、ファイナリスト期間に凄く成長されていて、私もミスキャンにエントリーしたら綺麗になれるのかなと思って綺麗になりたいって一心で応募しました。
- ・元々人前に立って何かを伝えるということに興味があった。人前に立ってみることで変わった視点を得たかった。
- ・大学一年生のときにミスコンの司会を担当して実行委員の方と知り合い、その方から「次の年は出場してみたら？」と声をかけていただいたからです。
- ・学生生活の集大成として、高い目標に向かって頑張りがかったから。友達が頑張っている姿を見て影響されました。

アナウンサーを目指すためだという回答があるが、事実、ミスキャンパス出身のアナウンサーは多く、例えば慶応義塾大学だと2013年の優勝者・宇内梨沙がTBS、2012年の小沢陽子がフジテレビ、立教大学の2014年ミス・準ミスがそれぞれスプラウトにいた角谷暁子と茂手木葉奈、2012年に最終エントリーに残った榎田沙也加がテレビ朝日、ミスの小沢陽子がフジテレビに就職している。その他、青山学院、上智、早稲田、東大といった都内名門大学はキー局のアナウンサーを多く輩出している（ミスターキャンパスについても、準ミスター慶応の榎並大二郎はフジテレビに、ファイナリストの辻岡義道が日本テレビ、ミスターソフィアのファイナリスト木下康太郎がフジテレビ、ミスター学習院ファイナリストの山木翔遥がテレビ朝日のアナウンサーになっている）。

「成長」「変わった視点を得たかった」「学生生活の集大成」「高い目標」という言葉が目につくが、これは学生たちが就職活動の際に書くエントリーシートの内容と酷似している。エントリーシートでは、大学生活の中で、いかに自分が人間的な成長を遂げたのか。新しい視点を得て、学生生活を有意義なものにしたかをPRすることが多いが、学生たちはアルバイトでの経験、クラブやサークルでの活動、海外留学やボランティア体験

等をネタにさまざまに書くが、ミスコンも、ほぼそれらと同列のものとして意識されているのだろう。ミスコンは就活のためだけにあると言ってしまっただけは言い過ぎだが、自由な時間の多い学生時代にチャレンジしたいことの一つとしてミスキャンパスがある、とまとめておくことはできるだろう。

末弘ヒロ子の時代は、ミスコン出場自体が退学に備えるものだと考えられていたが、学校を卒業することに重きは置かれておらず、唯一絶対の進路は良家に嫁ぐことであった。女子大生が増え、キャンパスがレジャーランドと言われた時代には、ミスキャンパスが花盛りとなるが、大卒女性はまだ戦力としては期待されておらず、露骨に社員の結婚要員として、職場の花として腰掛け入社する例も少なくなかった。男好みのコンサバファッションと言われた「JJ」の時代である。

そして、男女雇用機会均等法的な価値観が浸透すると、大学でも教養を身に付けるといった学科よりも実学的な学科の人気が増し、並行して当の女性たちも会社も戦力として女性をとらえるようになって、いつしか結婚目的あるいは腰掛けとしての就職という意識も薄れてきたのだろう。こうした状況を踏まえれば、男性のためのミスコンも、だんだん自分自身の向上のための機会（その中に就職活動も含まれる）として意識されるようになったと言うことは可能だと思う。

もちろん、女性だけが異性の好奇の視線にさらされ、容貌でもって序列をつけられる状況に従っているという面では、明治以来、いや少なくとも近世以来、変化がないとも言えよう。しかし、世間体を取り繕いながらインタビューに応じているだろうことを差し引いても、ミスキャンパス出場者のコメントには男性の影が薄く、女性たちが、自分の意志で、自分を高めるための機会としてミスコンを生かそうとしてきているのは確かであるように思う。

宮脇はミスキャンパス出場者に対して、得たことと失ったことについても聞いている。

得たこととしては、「私も頑張ろうって気持ちになった」と言ってくれる友達がたくさんいて、その人たちの何かしらのキッカケになれたこと。つらい時、しんどいときに本当に支えてくれる人たちがいるのだということを実感できました」というものがあつた。素直な実感だろうと思う。

逆に失ったこととしては、「私がファイナリストになって以降にTwitterのフォローを外したりして離れていった友達がいるんですけど、きっと嫉妬心からだろうと思って割り切る事にしました。他にもなにか失ったものがあるかもしれないけど、得たものが多すぎてかき消されています」。SNS世代の微妙な友人関係をリアルに物語っているが、自信にあふれたファイナリストが、自惚れ屋に見える人もいたのかもしれない。

また、このようなものもあつた。「普段から人の目があるという恐怖があつて学校を歩くのが少し怖いことがあつたり、見知らぬ人から厳しいことを言われたりすることがあるのは辛いです」。芸能人ならば、それも有名税として納得することもできるかもしれないが、ただの大学生としてはなかなかプレッシャーもあることだろう。

「急遽イベントなどの予定が入った時にバイト先や友達に迷惑をかけてしまうこと」と答えた人もいるが、さもありなん、と思う。

投票者が同じ立場の大学生という事もあつて、授業中に居眠りをしたり、携帯をいじったりということは一切せず、身だしなみをきちんとすることはもちろん、肌の手入れや健康管理、体重管理、正しい姿勢をいつも取ること…に気を遣つたという回答もあつたが、考えただけでもなかなか大変だ。ウォーキングのためのレッスン費用、イベントへの交通費なども自腹であることが多く、普段以上に化粧やファッションにも気を遣う必要もあるとのことで、経済的にもかなり大変なようだ。このように考えてみると、もしもミスキャンパスで上位入賞しようと考えているのなら、身も心も、経済力もしっかりキープできてないといけないうで、生半可な気持ちでは恥をかくだけなのかもしれない。

宮脇は、甲南女子大学でのミスコン開催について、男女共学の総合大学に比べれば小規模で、意識の高い応募者が出続けてくれるのだろうかかと危惧していたが、確かに、心身ともに健康で打たれ強く、自制心があり、経済的にも余裕があり、しかもルックスやコミュニケーション力も重視されるミスコンを開催し続けるのは、

なかなか大変だと思う。

ところで2016年10月に明らかになった慶應義塾大学の公認学生団体「広告学研究会」の解散と、同会が運営してきたミス慶応コンテストの中止は、今後、ミスコン自体に影響を与えてくるかもしれない。当初は未成年者の飲酒が問題であるとされてきたが、合宿所では女子学生に飲酒させただけでなく、性的暴行、そしてその過程を撮影し、実況報告までしていたと報じられている³。2003年には早稲田大学を中心にしたスーパーフリーによる集団輪姦事件、2014年には明治大学と日本女子大学の合同テニスサークル「クライス」による歌舞伎町で女子学生だけが路上で昏睡した事件、2016年には東京大学学生・院生による集団強姦・強制わいせつ事件、千葉大学医学部学生による集団強姦事件も続いたが、都内の名門大学で、似たような手口の事件が続いているのは、おそらくは氷山の一角であり、アイドルとして活躍する慶應義塾大学生・町田彩夏も、ミス慶応の面接でセクハラとも思われる質問をされたことを公開している（町田彩夏／まっちーお願いランキング 2016年10月11日など）。まだまだ泣き寝入りさせられていた例はあるのかもしれない。これが一大学の不祥事で済むのかどうか、またミスコン全体に対するイメージに傷がつかないかどうかは、今のところわからない⁴。

「女子の時代」のミスコンテスト

女性たちは誰のために着飾るのだろうか。そう問うたら、現代女性は、おそらく自分のため、と答えるのではないかと思う。例えば、若い女性たちから圧倒的な支持を集める写真家・蜷川実花は「私たちが美しくありたいのは、男性に選ばれたいだけじゃない。同性に、キレイと言われたいからだけでもない。結局は、自分のためにキレイでいたいんです」と語る⁵。自分が気持ちよく生きていくために、気持ちよくなるツールの一つにファッションがある。ミスコンも似たところがあるように思う。たしかに一時代前は、男たちの前で、水着審査を受け、男たちに媚びる側面もあったかもしれない。たくさんの人の注目を浴びたいという「虚栄心」、自分がヒロインになりたいといった結婚式願望のような思いもあるかもしれない。しかし、それだけではミスコン出場者は、女性たちからやっかまれるだけで、女性たちからもミスコン応募者が支持され、憧れの対象となる理由が説明できない。

堺市女性団体連絡協議会は「身長や顔かたち、肌の色や形状、プロポーションといった本人の意思や努力ではどうにもならないことについて、優劣や順位をつけることは明らかに人権侵害であり、差別そのものです」とミスコンを批判したが、安野モヨコが『美人画報』（1999）で美人になるための努力を描き、林真理子も『美女入門』（1999）等で美人への道を説き、藤原紀香や君島十和子たちも美しさを保つための努力を綴っている。前節でも書いたように、ミスキャンパス応募者も、日ごろの立ち居振る舞い、ケアについても怠ることができず、もはや「美女道」なのである。「女は美人に生まれるのではない。美人になるのだ」（「Domani」 2012.1）。

「an・an」は、特集で「美人は誰でもなれる」（2004.10.20）としたが、今やこれは一般常識と化しているであろう。コスメの進化、化粧術の進化。また、自撮り写真の技術向上、画像修正アプリの進化やテクニックの向上等々のITを使った<化粧>の誕生も、美人のハードルを低くしたのではないかと思う。また、美容整形については、今も批判的な立場をとる人が多いが、件数は多くなっているのだろう。おそらくは「プチ整形」という言葉が流行した頃から、美容整形への罪悪感は薄くなっているように思えるのだが、例えば湘南美容外科クリニックのホームページによれば2015年の来院数が811,434人だというから、世の中には数多くの<美人>が生まれているのであろう。

³ 「週刊文春WEB」（<http://shukan.bunshun.jp/articles/-/6659> 2016.10.11。最終アクセス2016.1.22）など。

⁴ ただ、MISS COLLEに掲載されていたミスコンの数は、慶応の事件が発覚する前の2016年夏には46大学（学部）だったが、事件後の2017年1月には75に増えていること（MR COLLEは29から50）、また慶應義塾大学の広告学研究会のミスコンこそ消えたものの、同じ慶応からSFCと理工学部、薬学部のコンテストが掲載されていた。事件の影響は人々のミスコン観を変えるまでには至らなかったのかもしれない。

⁵ 「蜷川実花による、映画『ヘルタースケルター解体新書』（FRaU 2012.8）。同記事をはじめとした書籍や雑誌記事、またその分析については米澤泉「仮装と武装」（『「女子」の誕生』頸草書房：2014）等の諸論文によるところが大きい。

かくして、現代における美人は、生まれつきである部分が全くないわけではないにしても、たゆまぬ努力（財力？）で、自分を高めることに成功した人として、尊敬を集める存在になっているのではないかと思われる。自分も、たまたま努力が足りないだけで、もっとがんばれば美人になれるのだという意識があるからこそ、努力を惜しまなかった超人＝美人を絶賛できるのではないだろうか。

オリンピックのメダリスト、成功した実業家、ノーベル賞の授賞者… 彼らを尊敬する者はいても、彼らを批判する人はあまりいない。生まれつきの能力や育った環境が関係しないわけではないにしても、それをたゆまぬ努力で開花させたために得た栄冠だと思っているからだ。今や美人も、生まれつきの部分も無関係ではないながら、たゆまぬ努力で勝ち取られた栄冠として尊敬される時代になったのだろう。

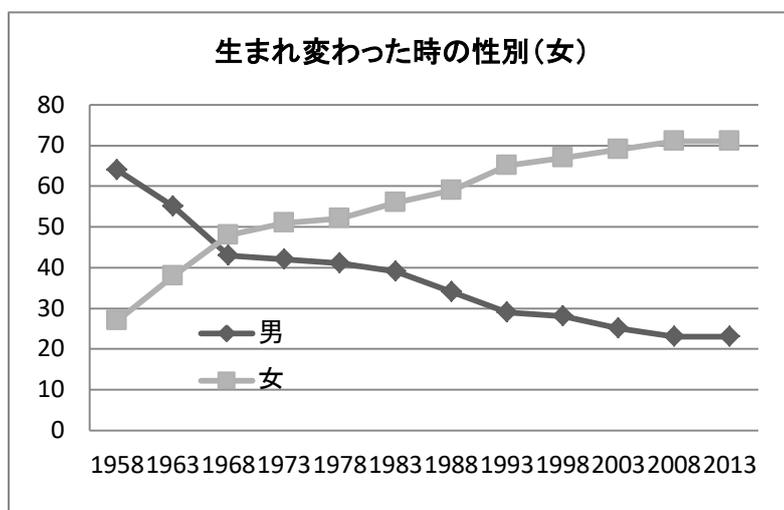
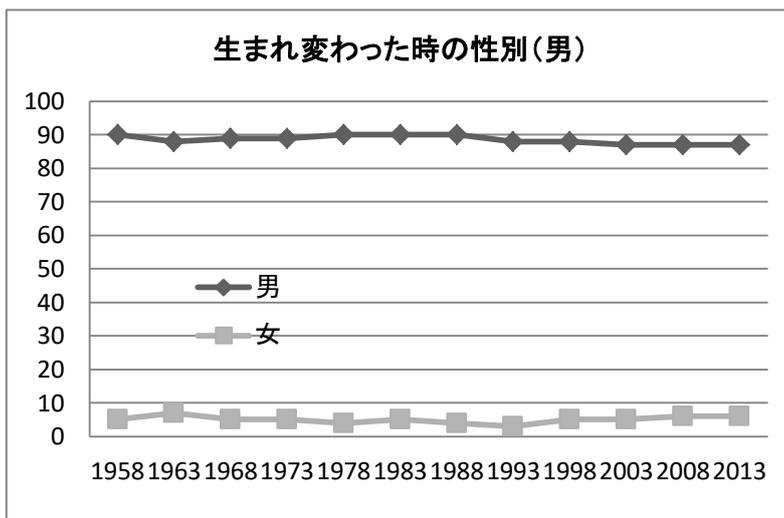
ももクロが女性たちに人気だと述べたが、その理由はAKBと違って水着になったり、恋愛系の歌ばかりを歌わないこと、握手会などをしないこと… つまり男性ばかりを意識していないからだとも言われる。しかし、それと同等か、それ以上に女性たちを引き付けるのは、彼女たちが次々に高い目標をもってチャレンジし、努力によってそれを達成していることではないだろうか。ルックスや身体能力、歌唱力も重要ではあろうが、それ以上に頑張ること、頑張ってアイドルを維持し続けていることに共感と憧れが集中しているのではないだろうか。

ただ、美人が、一般人とは全くかけ離れた生まれながらの神のような存在であると思う時代は終わったのだとしても、これは美人信仰が終わったわけではない。誰でも美人になる可能性があるからこそ、誰もが美人に

ならなければならないというレースが始まったことをも意味する。美人にならなければならない、美人でいつづければならない、というのは、女子の喜びでもあるかもしれないが、女性たちを新たに追い詰めるゲームが始まったのだと言えるかもしれない。

ところで、統計数理研究所の「日本人の国民性調査」によれば、生まれ変わっても男性になりたいと思う男性は 1958年の調査で90%だったのが、2013年の調査でも87%と、ほとんど変化がない。しかし、生まれ変わっても女性になりたいという女性は、1958年には27%でしかなかったのが、2013年では71%に上昇している。

女性が不自由な、不幸な存在であるという意識が年々減ってきているということだろう。おそらくこの延長線上に蜷川実花の「女子であることはすごい楽しんでるし、次生まれ変わる時も女子がいい」⁶、「大きなメインテーマは、“いつまで現役女子でいけるのか”死ぬまで絶対



⁶ 蜷川実花『オラオラ女子論』（祥伝社：2012, 15）

現役でいたいし、しかも今のままのスピードで駆け抜けていきたい」⁷といった言葉があるのだろう。そして、それは蜷川一人のものでなく、蜷川を支える多くの女性たちにも共通しているのではないかと思う。

女性差別や女性蔑視が根絶したわけではないにしても、蜷川たちは女子ならではの楽しみがあることにも気づいてしまった。もちろん、いつまでも自分を女子だと言い続ける風潮に対して、『貴様いつまで女子でいるつもりだ問題』（ジェーン・スー 2014）といった批判があるのも事実だ。しかし、40代女子、50代女子と、「女子」を自称する女性たちの年齢が、だんだん高くなっていることを思えば、この流れをとどめることは難しそうだ。

それにしてもミスとミセスの区別が完全に消え、20代女性も50代女性も全く区別がなくなったミスコンならぬ「女子コン」が開催される日は来るのであろうか？ また、ミスターコンが、こうした「女子コン」と同じように支持される時代は来るのであろうか？ いや、あるいはルックスの良し悪しに順番を付けるなどという野蛮な振る舞い自体が根絶する日が来るのかもしれない。10年ほどの時間がたった後、また考えてみることにしてみたい。

⁷ 蜷川実花『オラオラ女子論』（祥伝社：2012, 117）